

「誰かが好きな何か」はそうなくならないってことにもなりますね

語り手＝鯖屋（仲山） 優姫（高校一期生 クリエイターエージェンシ

ー会社） 聞き手＝竹内 彩音

一期生としての高校時代

一年目なんです。守山市内の中学校に通っていました。立命館の系列学校が守山にできるって話を母親が新聞か何かで見て、「ここいいんじゃないか」って教えてくれました。中学校の推薦枠っていうのがあったんで、受験勉強をしなくても内申であんまり苦勞せず行けそうと思ったのが最初のきっかけで。当時どんな学校かもわからなかったんで、もう親に流されるがまま選んだって感じです。

―実際通ってみてどうでしたか。

実は一年目はめちゃくちゃ後悔しました。一期生ですから、立命館守山高校をこれから始めていくということもあって、先生方がとにかく厳しくて、制服の身だしなみからちよつとしたことでもすごく注意される。まだ誰もなにもやらかしてないのに、なんでこんなに厳しくされるんだらうって。よくわからない空気感と状況をちよつと窮屈に感じていて、うん、なんか間違った学校に来てしまったかもしれないと、漠然と不安を感じてましたね。

あとは新校舎がまだ改装中で、一年間は別校舎に通ってたんです。エアコンがなくてとにかく暑くて。私立の学費を払っているけど、私立の設備じゃないぞと嘆いてました。

―そうですよね。一年目ってやっぱり学校のなんか体裁というか、そういうところも気にする。

本当にそうでしたね。その、学校としても発足したばかりの学校を成功させないといけないし、あらゆる場所から批判が出たらいけないと、先生たちもちよつとこう、多分今よりカリカリしていて、必死で。守山女子校から学校設置者移管をして立命館守山を開校した背景があつて、学校としてのバランスとか、全員が模索中の時期だったんだなど。先輩たちはいきなり共学になる環境の変化だったわけですから、学校ならではの伝統みたいなのを残していきながら新文化を作る必要があつて、今思うと通常の高校生活の始まりでは経験できないだろう、一期生ならではの空気感がありました。

―私もちよつと（服装を）崩してるから言われそうですね。

当時だったら言われてますね。しかも一年生全員を集めて注意されるかも。ちよつと思春期ですから、ちよつとなんか信用されてない感じもして、高校一年生は反骨精神みたいなのが結構よく育ったかなと。二年生になってから今の校舎になりクラスにも恵まれて、この学校での過ごし方を掴んできたので、学校選びの後悔は薄まっていきました。二年生の担任の先生が、比較的こう、ゆるさがあり、生徒を信じて任せてくれるタイプだったので、頭ごなしに怒られるみたいな日々からは解放された感覚がありました。正直、高校生ってそこまで注意しなくても自立していけるのでは？という思いはあります。

―それは思います。なんでもかんでもそうやって言われてもね。

窮屈さの反動で、与えられた環境の中でのびのびやっていく方法を考えるようになりました。

―体育祭とか文化祭とかも当時からありましたか

ありました。なんかダンス、今も残ってるのかな。

―聞いたことないです。なんか名前変わってるかもしれないです。

立守ダンス。立守ダンスも踊ってましたよ。守山女子高校から引き継がれたダンスなんです。身体のだこの筋肉が伸びてるんだろうとか思ってた。自分の中で意味が消化できないことに対して敏感な学生だったのかも。この制度に何の意味があるのかなと、理由がみつけれないと反発を抱くタイプだったと思います。

—私も多分同じタイプだと思います。で、今回校則とか色々変わりました。もうある程度崩しても全然オッケーだし、ネイルもピアスも化粧も髪も。

いつから!?

—つい先月からです。

めちやくちやいいことだと思います。はい。本当に時代に合ってる動きですね。

—しかもなんか前のルールはなんでこうなってるんだろうって。どういう意味でそうしてるんだろうっていうのは、あんまり説明できないじゃないですか。だから、それがあんまり良くないよねってことで、三、四年くらいかけて（変えていった）みたいな。

素晴らしい。いや、ほんとに大事だと思いますよ。当時の窮屈さを、あの世代は相当感じてた気がするんですね。そういう意味だと同級生間の団結力みたいなのは深まりやすかったかもしれないですね。

—なんか共通の敵みたいな。

敵というか、なんか息苦しいから自分たちでやれることをやろうみたいなのは年々強くなってきましたね。今も学校に在籍していらっしやる田辺先生は担任だったんです。自習の時間に隣の席の人と教え合っていると、前後の席でも質問がでてきて、じゃあ班の席の形にしようって机の向きを変えたら、田辺先生に席は動かさないでってめっちゃ怒られ

て。いや、でもこの方が勉強しやすいし、話しやすいんですけど伝えたけど、結局ダメで。当時はなぜダメかの説明が足りないと感じて、わかりましたと素直に受け入れにくかったんです。「なんでなんだろう」みたいな感じでモヤモヤが蓄積されて、班の形事件として記憶に残ってますね。

—今の田辺先生だったらどうだろう。あんまり言わないかもしれないです。

私が最初に先生に「教え合いたいので席を動かしていいですか？」

って事前に相談ができたなら形は違っただろうなと、今なら先生の立場になって考えると、生徒側からの質問内容も工夫できると思います。先生に許可も取らずにやりたいことをやったら、先生からしたら勝手なことをされたと思う、などはさすがに今はわかるようにはなりました。

—それもそうですけど、私もあんま納得いけません。

今の立命館守山は変化していつてるんですね。校則の変更も今日聞いて驚きました。

—大学があるから進路安心できるよねっていうところに来る人がやっぱり多いんですよ。当時もそうでしたか。

立命館守山はできたばかりだったので、子どもの意志というより、親が大学までエスカレーター制で進める学校に子どもをいれて安心したい人が多かった印象があります。一期生のため情報もそこまでなく、生徒自体は安心したいから行きたいところまでイメージが追いついてない人が多かったんじゃないかな。できたばかりの私立に入学を決めるのはやっぱり親とか先生が促さないと決断できない人が多いでしょうから。

将来の進路選択

大学は内部進学で立命館に通われるんですか。

—そうなんですけど、今はとりあえず大学に行きたいと思ってます。でもその後の進路がうまく想像できないというか。

理系ですよ。

—めっちゃ理系です。めっちゃめっちゃ理系です。なんかもう、なんか喋ってたら理系だよねとか言われるんですよ。

なるほど、そういう見方もあるんですね。理系だから、何かこう、分野決めて進学しないとですよ。

—うーん、でもそこはあんまりこだわってないですね。理系は私が得意な科目がその理系のとこに集まってたから行ったっていうだけで、別に国語があつたとしてあんま好きじゃないですけど。別にめっちゃくちゃでないっていうわけでもないし。でも興味があれば何でもやりたいって思うんですよ。

それで今この聞き書きもやってみたいなど。

—これはマジで興味です。本当に大人の人と話すのはめっちゃ好きなんですよ。なんか自分が知らないことを知ってる人と話すのめっちゃ好きで、学びがあるじゃないですか、色々。そのたびになんか成長してる感じがするんですよ。

確かに日々の視点にちょっと変化があるかもしれないですね。私も年上の人だったりと話すことはすごくよくなったなって思うことが歳を重ねるにつれ多かったですね。大学生の時とか、社会人の始めの頃とかはそういう出会った大人のちよつと無責任な発言が結構響くみたいな。

—わかります、わかります。

コミュニケーションを大事に

（仲山さんは物語を作る作家が所属するクリエイターエージェンシーで働いている。作品の版權の管理、運営をはじめ、作家の方々の創作活動をサポートしている。）

—ちよつと話変わるんですけど、なんか、コミュニケーションとか、なんかすごい大事にされてるんだなって印象をめっちゃ抱いたんですけど。

そうですね、大事にしています。人を理解する手段みたいな言い方するとあれですけど、うん。読者と漫画の間にもコミュニケーションが存在するじゃないですか。小説とか好きですか？

—すごい読みます。

小説って一見、一方的に字を受け取ってるだけに感じるかもしれないけど、でも実際は、何かしら問題を抱えている社会に対して、作者が気になっている点を取材して、そこに自身の思いを込めて物語にしている、文章を読むことで読者との対話が生まれてるんですよね。私は作者ではないですが、編集者という別の立場でファンの人にイベントを企画する機会も多くて、直接参加者と話せない環境で準備をするときでもきつとこの作品のファンの方はこういうのが見たいんじゃないかと想像を巡らせて用意します。直接的ではなくても、その思考の中で対話が發生しているわけです。参加者（読者）だけでなく、作者とも対話する、二者の間を繋ぐ仕事でもあります。

「らしさ」について考える

—そうですね。その読者の立場というか。うん。じゃあどういふものが面白いんだろうっていうの。そういうのってすごい、面接とか、例えば

企業の面接を受ける時とか、企業はどういう人が欲しいんだろうとか、そういう視点でなんかすごく大事なことだなんていうのは常日頃思ってます。

確かに一定数相手方の想像をするっていうのは大事。でも、どっかでそれに合わせすぎても疲れるんで、ある程度は自分らしくいるみたいな感じが多分大事になってくるんじゃないですかね。

—そうなんです。その個性とその理想像のなんか調節というか。はい。どれくらい理想像でいるべきで、そこにどうやって個性を出していくべきかみたいなところで、もうすごく悩むんですよ、いつも。

でも竹内さんの場合は、個性を出すっていうよりは、個性をどう伝えていくかのところではないでしょうか。もう持っているものの変換作業ですよ。もう、あの走り方に個性を感じました。（約束の時間の五分前、飲み物を買った聞き手がコンビニへ走った際、偶然語り手に遭遇していた。）

—それはどういう意味ですか（笑）。

例えば「水を忘れた」とかがあった時に「忘れました」って言えばいいか！っていう奔放なタイプの人もいれば、事前のメールで準備するって書いたし、走ってでも用意しようと思う真面目で責任感が強い人もいます。で、面接とかがつめてつちやかしこまった発言も大事なんですけど、「私は水の準備を忘れたことに五分前に気づいたら汗をかいてでもコンビニに走って間に合わせるタイプです」って自分の行動を伝えることでどんな人柄かは伝わるんです。

私は普段、漫画の編集をしているので、キャラづくりを例にしてお伝えすると、物語をつくるときのキャラクターってそうやって行動から作るんですよ。「五分前だ、どうしよう」ってなった時に、二度寝する

人と、電話して嘘つく人と、走ってでも間に合わせようとする人。良し悪しの話ではなく、その描写はその人の個性が行動に滲む、それがキャラクターってだけなんです。キャラクターをだらしのない人物にしたいなら二度寝ですね、みたいな感じで。

自分にある個性を相手に伝えるにはどうするかっていうテーマに戻ると、自分の個性を出そうとか変えようとかはあんまりやらなくてもよくて、あるものを相手に伝わるように変換して表現する感じですよ。もし、持っている個性そのものが、目の前の人や所属したい会社にならなければ、ちよつと調整しようくらいならまだありかもしれませんが、無理に個性を変えてまで合わせにいく必要はないという判断もありですね。

—ちよつと今すごいワクワクしてます。なんかすごい革新的なことを教わった気がしました。漫画の話とそこで繋がるんですね。

竹内さんクラスの真面目な人、あれですよ、いただいたメールでは自分のことをお堅いみたいな書き方されてましたよね。なんだっけ、あれ面白かったんですよ。メールで「最近の高校生という感じではないので、あまり期待しないでほしい」みたいな……「かなり固い人間だと心得ておりますので。」（聞き手が語り手へ送ったメールの一部）面白かったですよ。個性が滲み出てるわと思った。この一行が特に面白かったです。

—そこで、なんかよく思うのが、私は人間の観察力がなくて。その、先ほどおっしゃってたじゃないですか、私の走り方を見て感じたこととか。あれだな、そういう人間の観察力ってすごい欲しいなと思ってます。

なんかスキル、スキルセット三つ備えられるとしたら一こ観察力が欲しいってことですか。

―あ、欲しいです。

欲しいの？。なんで欲しいんですか？

―それはやっぱり私の思ってることとして、将来もし成功したいとか、もっとビッグになりたいとか、お金持ちになりたいとか、そういう夢を追うのに人間関係ってものすごく大事だと思ってまして。だから、いい人と悪い人を見分ける方法ってやっぱり必要だなって思ってるんですよ。やっぱり自分に投資しても、投資した結果を出すのに時間が必要ですし、そういう悪い人間関係ばかりだと、その時間も削られていくし、それをするモチベーションも削られていく。

今、後天的に観察する力が身につけられるものかどうかっていう意味で答えると、多分、意識してたらある程度は身につくとは思いますが。ただ、本当に必要かどうかは今、聞いてて怪しいな、とも思ってます。

このインタビューの一時間くらいで、今現状で竹内さんの言動とかに対して不快に思う場面はないですし、人とも上手に話せるなっていうか、そういう印象を持っています。そのスキルが欲しいと思った悩みの原因が、今いるコミュニティとかでのギクシャクにあるとすれば、それは今の、しかも日本の学校社会に適応しにくかったっていうだけの可能性があつて。それは限られた環境での問題かもしれない。

自分の持っているパワーバランスみたいなステータスって、どこを伸ばすかも重要だなと思っていまして、誰もがきれいに均等にはなっていない。私の場合はめちゃくちゃバランスがいいけど、星五にしたいスキルがそこまでない。ひとつ飛び抜けている何かがあれば、そこを磨いた方が社会ではすごく必要だったりするんで。

今竹内さんの問題意識として観察力が足りてない自認をしているけど、伸ばすといい星五も持っているかもしれない。苦手を補う行動を優先して後天的なスキルをある程度一般社会に馴染む程度身につけるっていう方法があります。会社を運営するとかの目標の上では必要なかもしれない。ただ、会社っていうのはピースみたいなもので。得意不得意のピースを補ってくれる人と一緒にチームになればいいっていう考えもありますから。その組織運営とか自分の目標を達成する上で不足しているスキルがある場合、そこを自分で補う、それか他者に補ってもらいたいパターンが選べるので、「絶対観察力をつけるのだ！」っていうより意識として自分はここができないってことをわかっておくだけでもいいかもしれないですね。

―そうだ、一こ聞きたいことが。絶対これ今日聞きたいって思ってたことがあるんですよ。私の担任の先生が、すごく読書とかに対して奥が深い人で。で、私もなんかそういうタイプだから、エッセイとかの課題でめっちゃ書いて、それをなんか適正に評価してくれる人だになってすごい思うんですけど、その人から投げられた問いで、「電子書籍がいっぱいあるのに、なんで紙の本っていうものが未だにあると思いますか。なんで図書館っていうものがすごく重宝されて、なんで国が図書館とかそういうものに投資して、わざわざ市立っていうので建てたりとかしていると思いますか」っていうのを聞かれて。で、聞かせてほしいんですよ、それを。本を作る側の立場、それに携わっていく立場の人ってどういう考えを持ってるんだろうなあって。

なんかもう、めっちゃ仕組みの話をしちゃうと、はい、書店っていうのが全国にあつて、そこに流通する経路も整ってるから、ちゃんと本が世の中に行き届くようになっていて、電子書籍だけだったらSNSを

活用したプロモーションの強化が必要で……っていう話はあるけど、そういう話じゃないもんね、多分。

先生からの問いは「紙がなんで存在するか」。作家と日々喋ってても、やっぱり紙の書籍化の依頼がくると嬉しいと思う人も多いです。幼い頃から本が好きで、紙に愛着があつて、手に取って読むことが好きだから、手にとってもらいたいという思いで書いている人もいます。「そこに宿る力ってなんなんだろう。」と掘り下げていくと、ひとつこの問いに対する考えが浮かびそうです。で、これから私たちの時代以降は電子書籍でいいじゃんって、もっとなつていく流れはあると思うんです。けれど、電子書籍の方が紙より売れたとしても、紙になるのが嬉しいっていう人も存在します。

それで紙だからこそできることに注目すると、紙には電子書籍だできないけど、表紙が詰められるんですよ。例えば、今日ちょうど本持ってきたけど、表紙を触ってみてください。こういう手触りの表紙にしようか帯の部分はこういう紙質でとか、折り返しのカバーはこの色にしてとか。電子だとこの「立体感」っていうのはやっぱり感じられない。紙であることで存在をある意味一つ肯定してくれているという実感はありますね。存在自体に作り手側も価値があるし、それは受け手も同じでしょう。同じ一四五〇円を出すなら、立体感のあるこれを所有したいっていう欲を持つ人がいるのもわかる。逆に電子で気軽に持ち運ぶことを望む人もいます。シンプルな回答にはなるけど、でもやっぱり、紙が好きな人が紙を愛し続けたら、紙書籍は残っていくでしょうね。例え、その実数が少なくなつて値段が高くなつても、その一冊にお金を出したい、欲しいって思う人は残ると思います。紙に愛着を持つ人が存在する限り、

紙書籍は完全になくならないし、究極、「誰かが好きな何か」はそうそうなくならないってことにもなりますね。

【感想】

個性、人間関係とは——そんな「生き方」を学んだ素敵な出会いでした。特に、「個性の表現」についての言及には心を動かされました。私自身が持つ個性は、一つ一つの選択、所作、メールの内容にまで表れていて、人はそれを見ているということ、そして、誠実でいることの重要性を学びました。

また、なぜ人は紙を重宝するのかという問いについて、語り手ならではの回答をいただけたと考えています。本は創作物の存在を肯定してくれる「立体的な証」であり、それを愛する人がいるということ。そこに、語り手の人生の積み重ねからくる深みを感じました。



立命館守山高等学校にて

右…竹内彩音（聞き手）

左…鯖屋（仲山） 優姫さん（語り手）